近衛家のペット！ ～妖獣の狐雪～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近衛家のペット！ ～妖獣の狐雪～

【Nコード】

N1592BA

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

近衛家に迷い込んだ一匹の妖怪と、その飼い主となる木乃香の御話。

自己満足小説のため、アンケート類などがありません（気が向いたらするかもしれないけど）。キャラ崩壊、原作崩壊等が受け入れられない人には勧められません。作者は寂しいと死んでしまいません。適度な感想を与えましょう。作者に文才は一欠片もありません。

妖怪用語及単語説明帳（前書き）

わたくし桜楼は、行き当たりばったりで小説を書いています。故
に、追加設定などが非常に多い。
その中で出てくる単語等を説明して行こうと思います。

妖怪用語及単語説明帳

《妖獣の契約》

- ・仮契約の様なカードはなし。本格的な契約を交わすと同時、主人の体の一部に『刻印』が浮かぶ。
- ・念話不可能。
- ・妖怪の制御可能。
- ・召喚可能。
- ・妖怪の《闘獣解放》。つまり力の解放をすると、主へ妖怪の『妖力』がパスとして送られる故に防御力、攻撃力等の肉体的サポートが施される。
- ・妖怪の肉体的年齢を契約しているうちは止めることが可能。

・簡易的な契約と本格的な契約があり、簡易的な契約は『妖怪を強制的に抑えつける』効果を得る。本格的な契約は『妖怪と人間両者の同意』が必要。効果で言えば、『妖怪を使い魔として従える』。

《畏れ》

- ・妖怪の『力』。
- ・「ぬらりひよんの孫」を参照。
- ・しかし『鬼發』や『鬼憑』はなし。
- ・畏れの出力こそがその妖怪の力量とされる。

《鬼火》

- ・《白面金毛九尾の狐》の一族が使う《畏れ》。
- ・外見的には青白い炎。
- ・炎の温度調整は術者（白面金毛九尾の狐）の自由。

《狐尾の太刀》

- ・狐雪が使える唯一の《畏れの応用》。
- ・九尾内に鬼火を通わせ、尻尾それ自体と尻尾の毛を硬化させる。
- ・鬼火の密度によるが、大抵の攻撃は防げる。

《尾裂狐の太刀》

- ・《白面金毛九尾の狐》一族に伝わる家宝であり宝刀。
- ・制御のできない者が持てば畏れを一気に持つていかれる。更には一気に畏れを吸い取った反動での《刀を持つ妖怪自身の暴走》へと繋がる。

- ・本来は《白面金毛九尾の狐》の実家たる場所に祭られている。
- ・《白面金毛九尾の狐》の血を持つものなら、いつどんな状況でも此方への転送が可能。

《白面金毛九尾の狐》

- ・狐雪の妖怪としての種類。
- ・人を騙すことをなよりの愉悦とする妖怪。
- ・美女に化けた伝説が残るが、実際のところそれは化けたのではなく「元からその美貌」を持っていたという方が正解だ。更に言えば《美貌の呪い》として一族全てが超絶美女、或いは超絶イケメンに

なる。

・それなりの実力を伴えば九尾や耳を隠し、人間社会へと侵入することも可能。

・子供の《白面金毛九尾の狐》は全ての毛が真っ白である。大人になれば九尾は金に染まる。

《境界破り》

・結界に隙間を作る能力。

・結界と外の境界を破る故に《境界破り》。

・狐雪の父親が使っていた技。亡くなる前に狐雪に覚えさせたある意味で《卑怯な技》。

妖怪用語及単語説明帳（後書き）

話の中で「わかんねーよこの単語メーン」などと思っただら感想等に書いてください。

その際には、こちらで回答させていただきます。

矛盾点などありましたら御指定してくださると幸いです。できうる限り直します。

第壱話『妖獣の契約』（前書き）

完全な自己満足小説。更新不定期。作者は一応受験生。更に作者には一切の文才も、一片の読解力もないです。

それらを踏まえたとうえで読み進めていただきたい。

では、第一話どうぞ。

第壹話 『妖獣の契約』

突然ですが、私妖怪です。

近代の人間たちは「妖怪だぞー！」なんて叫んでみても「きゃーかわいー！ こんなちっちゃい子もコスプレするんだー！」みたいな反応をします。嫌なご時世になりましたなあ。

私達妖怪……特に九尾の妖怪は悪戯こそがアイデンティティ。しかし今の世は不法侵入もできないし（セキュリティ高え……）、子どもと遊んでたら「早く帰りますよ！ あんな変な子と遊んではいけません！」とか言われるし（いや、これは昔からか。あの時は「なあに妖怪と遊んでんだバカたれ！！」だったけど）。

それにしても、私達妖怪は妖怪を騙したり悪戯をするなんてこと、そうしません。

ちなみに今の私は人間の肉体年齢的には十四歳。………実質的な年齢は既に百年を超してたりするけど。

………そんなわけで、今の私、逃げてます。

え、どんな訳だつて？ 私だつて知らないよ。突然包帯ぐるぐる男が炎の剣を持って襲ってきたんですから。私がどんな訳なのか知りたいくらい。

「ねえ！ 少しくらい話を聞いてくれてもいいんじゃないの!？」
「うるせえ、どうでも良いから死ね」

とまあこの通り。ええ、話を聞く耳持たないおバカさんなんです。そんなおバカさんに既に脇腹を刺されました。

先程言った通り、私ら妖怪は同類である妖怪に悪戯なんてしない。だから刺される理由も分からない……。

溜息が出そうです。……はあ。

とりあえず昔と今では大違いの民家の家の屋根をぴよんぴよん跳ねて逃げてるんだけど……。

どかああん！

どばあああん！

がっしやああああん！

私が避ける度に『炎の剣』で民家を潰してますこの人。

「ちよつと、力任せとか止めてくれない？ 避けてる私の方が心苦しくなるんだけど」

「オメエが避けなければいいだけだ」

「死ねと？」

「そう言ってるのが分かんねえのか、メス犬」

「犬じゃない、狐だ！ この九尾が分からののか、お前は！」

そう言うわけで避けて避けて避けてます。

お、なにやら結界のある場所を発見。『境界破り』でも使えば、結界の中に入るのは簡単なことだし。

「さっさと仇討たれろ、駄犬があ！」

「誰が駄犬だ！ 駄狐だこんと呼べ！」

あ、間違った。

駄狐ってなによ。

「くっ……」

私の畏れ^{ちから}である《鬼火》を足に纏わせる。鬼火は九尾だけが使える個別能力みたいなもの。

鬼火は青白い火だ。その炎を足に纏ったところで別段スピードが増すというわけでもない。使い方次第では可能だが、今回に限っては速度なんて二の次だ。

赤い屋根で急停止。更に急回転。男と対峙する形になる。

「っ……」

男も止まるかと思ったが、どうやらそれはないらしい。余程私に怨念があると見える。

こんな人と面識ないんだけど……。

止まりそうにない剣を右にかわす。とんでもない熱気が左半身を襲ったが、今はそれどころではない。少しくらいダメージを与えて、逃げ切らなければ。

「うらあー！」

左足を軸として、右足で相手の横腹に回し蹴りをお見舞いした。うめき声と共に男は吹っ飛び、地面へと落ちた。

「よし、逃げよう」

もう一度足に鬼火を纏わせる。これは攻撃じゃない。速度アップのための鬼火だ。

* * *

「はぁ……はぁ……ここまでくれば、大丈夫でしょ」

『境界破り』で結界を掻い潜り、山の中を駆ける。しかしさすがに体力の限界。木に寄り掛かり、一息吐く。

傷は……意外と深い。血は未だに止まることを知らず、流れ続けている。このままでは逃げたは良いけど失血死してしまう可能性まで出てきた。

「誰か、いるんですか？」

その声を私の耳が捉えた。鬼火を周囲に灯らせその声の元を睨みつけた。

「……っ！ 妖怪！！ それも九尾か！」

男性はメガネをかけた、賢そうな人間だった。私をいきなり妖怪だと咄嗟に判断し、逃げもせず刀を抜いたということはそれなりのやり手……。ていうか刀を持つてる時点で吃驚。今の世ではじゅーとほーいはんとかで捕まるんじゃないかな？

閑話休題。

剣を持っているということは、恐らく剣士。九尾を見て咄嗟に剣を抜いたということは余程の使い手か余程の馬鹿だ。

私の直感が、余程の使い手なのだと告げた。

警戒する。九尾から鬼火を放出させる。

「む……怪我をしているのですか？」

「貴様には、関係、ない……」

貧血からか、頭がくらくらする。
それでも鬼火をなんとか維持し、毛を逆立てて威嚇を続ける。

「そんな怪我をした人を放ってはおけません」

「……お人よしだな。昔の人なら弱っていることを良いことに殺そうとしているのに」

笑って強がった。

しかし、確かにある意味限界だ。くらくらするどころか、視界がかすんできた。まるで霧に覆われた様になにも見えなくなっていた。

「詠春様！ それは！？」

「妖怪。それも九尾の大妖怪。……保護の準備を」

「は！？ 正気ですか、詠春様！！」

「正気です。……幾ら妖怪でも怪我をしているこの子を放ってはおけません」

「……分かりました。では、せめて力の封印を……」

異常な程に男性と女性の声が遠ざかっていった……。

* * *

自然の香りが遠くから匂う。

身体を包む温もりのなか、私は起きた。目を開けると、どうやら私は白い布団に寝かされている様だ。うつ伏せで。

まあ、尻尾があるし……当たり前か。

「……ていつか、うじどじ」

当たり前な感じに起きようとして、疑問が虫の様に湧いてきた。
ここはどこなのか。

あの妖怪はどうしたのか。

何故私は寝かされているのか。

そもそもこの状況はなんなのか。

「わひゃん!？」

わしつと一本の尻尾を誰かに掴まれた。忌々しげに背後を睨む。
そこには女の子が二人立っていた。見た目は四歳だろうか。いや五歳かもしれない。

しかし、彼女たちが何歳なのかはこの際どうだっという問題だ。

問題は、そんな幼児とも言える彼女等を、何故私が見上げる破目になっているのか、だ。

「ビックリさせてもうた？」

こくりと……というかぶんぶんと頭を縦に振って頷いた。

「このちゃん……悪戯せんほうか……。怒られるで？」

髪の毛を腰まで伸ばした女の子のことをこのちゃんと呼んだ、サイドテールの女の子がビクビクと怯えながら言った。

「大丈夫や。お父様は害ない言うてたやん」

「え、いや。その子に怒られるんちゃうよ、詠春さんに怒られ」

その時、部屋の襖がススス……と開いた。

「おや、眼が覚めましたか」

そこには先程のメガネをした男性が立っていた。
自動的に警戒モードになった。

「シャ　！」

毛を逆立てて威嚇。近寄るなど暗に言う。

「狐ちゃん、お父様のこと嫌いなんか？」

「……………おいお前。私になにをした」

女の子を無視して、その後ろに立つ男性に向かって言う。

私の身体をこんな小さくしてくれやがったのはほぼ絶対の確率で
この男だと直感が告げた。

「あまり警戒しないでください。……………木乃香、刹那君。ちょっと二
人で遊んできなさい」

「は、はい」

「はい。行く、せつちゃん」

「うん」

長い髪の毛の女の子がサイドテールの女の子の手を引いてどたとど
たと足音を立てて部屋を出ていった。

「……………さて、では少し御話しをしましょうか」

* * *

「……確認です。怪我をした私を貴方は放っておけず、保護しました。しかし私を危険視した人達を抑えるために《妖獣の契約》を交わしたと……」

妖獣の契約。

妖怪と人間は本来交わられぬ存在同士。だがその《本来交われない境界線》を無くす契約だ。しかしその契約は本来結ばれることはそうそうない。なぜなら、妖怪が上に立つことができないからだ。だから、この様に妖怪が気絶してる間に強制的に契約を結ぶ他はない。

「で、そんな強制的な契約をしてくれたおかげでこんな姿と……」

さつきまでいた女の子よりも背が低いかもしれない。……いや、完璧に低い。さつき私が見上げてたくらいだし……。

「ええ、すいません。契約で無理矢理力の封印をさせないと、過激派の方々がうるさいもので……」

過激派たるものがどんな者たちなのかは知らないが……。それよりも気になることがある。

「私の主は、誰なんでしょうか」

まさかあの小娘たちが自分の主なんてことはないだろう。もしそうなら私は自害してでも契約を破棄する。

「勿論私です。貴女の力の制御も、私に任させていただければ良いのですが」

「……怪我の手当ても貴方が？」

下の袴は着ているが、上はサラシを巻いただけで服など着ていない。別に、服なんて自分の体温を保持するための物の為構わない。今は夏だし。

ただ問題は、私は殿方なんか上半身を曝け出したのかということだ。

「いえ、私は治癒に長けているわけでは無いので……。専門の治癒術師に任せました。勿論、女性ですよ」

どうやら気の使い方は分かるようだ。
少しだけ安心。

* * *

「こちらが木乃香。こちらが刹那君です」

小さな巫女服を貸してもらい（何故このサイズの巫女服があったのかは知らない）、それを着た私は二人の女の子の紹介を受けた。

「うちが木乃香や。よろしゅうな、狐ちゃん」

「せ、刹那と申します！ え、えっと、よろしく、狐ちゃん」

木乃香は柔らかい性格だということがモロに出ている感じ。刹那は、逆に堅苦しい感じだ。

「私に名前はないから九尾の狐って呼んでくれると嬉しいかも」

営業スマイル。

まだ木乃香のことを信用した訳ではない。いつ何時尻尾を掴んでくるか分からないから……。

しかし詠春さんの娘だというのだから、仕方ない。

「名前がないんかあ。一々九尾の狐ちゃんって呼ぶのもなんやめんどいし、ウチが名前付けたるか？」

木乃香は嬉々として提案した。それを拒否する理由も無し、勝手にさせておいた。

* * *

「ユキちゃん、行くえー」

「おー！ 来ーい！」

蹴鞠で遊んでいます。いやそれにしても、木乃香は良い子です。今の世の子はゲームをしていてこの様な文化的な遊びをしようとしなからぬ。

え、別に楽しんでませんよ？

そうそう。私の名前は狐雪と書いてユキに決まったらしいです。なんでも雪のように白い毛並みの髪と尻尾を持つてるから、だと

か。いや別に気に入ってなんかないから。

「次はせつちゃんやー」

「刹那ー、行くよー！」

「は、はい！」

三人で遊んでいる姿を、縁側で詠春さんが眺めてたりする。なんか微笑んでた。

* * *

「ユキちゃん、どうしたん？」

「お風呂だけはやー！」

「なんでや、外で遊んだんやからあかんえ」

二人に襟首を掴まれ、「あーっー」などと呻きながら引き摺られて大浴場の脱衣所まで到達。水浴びを偶にするくらいだった私からすれば水に肩まで浸かるなんて有り得ない話。

「ほれ脱いでー」

一秒で脱がされた。

どんな仕組みなのか皆目見当もつかない。

「そのまま露天風呂の様な浴場の中へと引き摺りこまれる狐雪であった……」

「誰に説明しとるん？」

子供三人で入るには広すぎる大浴場で木乃香に頭を洗われています狐雪です。

わしゃわしゃと自分の髪の毛が泡立ってるのを見るとなんだか妙な感覚になる。

「痒いところはありまへんかー？」

「ありませんよー」

木乃香はさつきから髪の毛をわしゃわしゃする一方で全然洗い流そうとしてくれない。このままだと私の髪の毛が全て抜けそうだ。

「そろそろ流してほしいな〜」

「ん、そうなん？　しゃあないなあ……もちつとやりたかったんやけど」

桶にお湯を淹れて、それを頭からばしゃつと被せられる。

それを何度か繰り返してからシャワーで頭を洗い流される。さっきの桶の御湯になんの意味があるの。

「せつちゃんせつちゃん。今度は身体洗うで」

「ええ？　さ、さすがに身体はええんとちゃうかな……？」

刹那まで私の頭を洗ってた。いや、一緒に洗ってたわけじゃないのか。ただ見てただけ？

ていうか木乃香は今なんて言った？

二人は懲りずにお風呂の中でまで尻尾をもふってくる。謝るくらいなら触ってくるのを何とかしなさい。

「まあいいけどさ」

「あ、ええんか？　じゃあ遠慮なく」

「いってそう言う意味じゃ　にゃあああああああああ！」

* * *

お風呂での大惨事を近衛家の女中さんに片付けさせることになった。申し訳ない。

「ユキちゃんの尻尾って石も碎けるんやな……恐ろしいやつちゃ」

「木乃香と刹那が触ってこなければあんな風にはならなかった」

「ごめんな」モフモフ。

だから寝るときまで尻尾をもふってくるのは止めなさいって。最早この感触に慣れ始めてきた……。

ちなみに、今は木乃香の部屋にいる。詠春さん曰く、私を妖獣として従者にさせた理由の大半は刹那と言う未熟な護衛の代わりに立派な護衛をこなしてほしいからだそうだ。

ちなみに魔法使いとかいるらしい。

なにを馬鹿なこと言ってるんですかとか言ったら「妖怪だって同じ様なものでしょ」と言われてシヨックを受けた。

「せつちゃんもはよ寝よ！」

「……………」

「触りたくてうずうずしとるんのはねばねやで？」
「で、でも……ウチが近づくと、ついモフってしまいそうで……！」
「……もういいよー。別に嫌な気分になるわけでもないし……」
「え、じゃあ変な気分ってどんな気分なん？」
「大人な気分」
「……？」

木乃香にはまだ早い話だから遠回りに直球な回答をしておいた。

第貳話 『日常となりつつある日常』 (前書き)

Q 「だから他の二次小説の更新はどうした」

A 「(- 。 -) y 」

第貳話、どじぞ。

第貳話『日常となりつつある日常』

縁側に座り、ぼけーっとする。

私が今なにを考えているかと言えば、「どうしてこうなった」。いつの間にか近衛家に住まうことになっていたのだから、未だ理解が追いついていないと言つのが正直なところ。

「ユキちゃんユキちゃん！」と、木乃香。

「ユキちゃん、こつち来いひんの？」と、刹那。

「少し休みたいから」と言い訳をする。二人は「なら仕方ないと蹴鞠を続ける。」

一番の謎は、この二人だ。

妖怪であるはずの私に普通に接している。木乃香はなんとなく分かる。優しい性格や、これまでの行動や行為で差別をしない主義だということはずぐに分かった。

しかし、刹那は木乃香の護衛だ。私と言う「危険生物」がいながら、私と友達の様に接してくる。もしかしてこの九尾が見えていないのだろうか。いや、それはないか。

「どうしたのですか、狐雪。木乃香や刹那君と一緒にには遊ばないんですか？」

後ろの障子が開き、そこから出てきたのは詠春さん。何故ここか

ら出てきたのかなんて疑問には思つまい。なぜならそこが詠春さんの部屋だから。

「……………私は、彼女たちと遊ぶ資格なんか、ないと思うんです」「資格、とききましたか。はは、これは重い話ですね。……………どうしてまた?」

笑つてはいたけど、詠春さんの表情から、話そのものは真剣に聞いてくれていることは理解できた。

「……………妖怪である私が、普通の人間と遊ぶなんて、本来あつてはならないことなんですよ」

これまで人間と遊んだことは何度もある。だけれど、その度に私はその子供達の親から……………。

「貴女の過去になにがあつたのか。なんとなく、想像はできません。ですが、それが彼女等と遊んではいけない理由にはなりえないのではないでしょうか」

いつの間にか横に座つていた詠春さんの顔を見る。その眼は刹那と一緒に遊ぶ娘を見ていた。

詠春の目に映る木乃香は、とても楽しそうだ。

今度は普通に木乃香を眺める。……………本当に楽しそうに、刹那と遊んでいる。

「妖怪は人を喰らう。私は……………いつの日か、木乃香を喰っちゃうかもしれませんよ」

「大丈夫です」

「うにゅっ……………」

詠春さんは私の頭に手を置き、撫でてくれた。優しい父親の温もりだった。

懐かしい、温もりだった。

「私は、貴女を信じてますから」

詠春さんは私の眼を見ながら言った。確かな確信を持って、言うてくれた。

なんで、そんなことを言ってくれるのだろうか。人間で……陰陽師の末裔であるはずなのに。

「どうしてそんなことを……」

「だって貴女、さっきまで木乃香たちと楽しそうに遊んでいたではありませんか。本当は、遊びたいんでしょう？ 木乃香と刹那と……遊びたいはずですよ。少なくとも、貴女はそうしたくてうずうずしている様に見えます」

頭を撫でながら、そう続けてくれた。

……………。

「……？ ははは、なにを泣いているのですか、狐雪は」

「ふえ？ な、泣いてなんかいいですよ！」

「はいはい、そういうことは、証拠を無くしてから言いましょうね」

そう言いながら、私の目元を手で拭ってくれる。優しい人だ。

この人なら、私の主でも良いかな。

僅かに、そう思えた。

「……………」

「少し、漏らしてもうた……………」

「安心して刹那……………私もその…………… だから……………」

木乃香だけ、笑顔。

なんでそんな笑顔でいられますか木乃香さん。本気でそう訊きたかった。

そんなこんながあつた今日も、お風呂に入る。野良で生きてた頃は本当に偶に水浴びをするくらいだった。水は少し苦手だったから。でも今はそんなことはない！ シャワーを浴び、頭を洗い身体を洗い、お湯に使ってぶかぶか浮く！ これこそ至上の極楽なり！

今日は少しだけでも、漏らしてしまったこともあつて早めの入浴タイムとなった。脱衣所に行くまでの廊下が、いつになく不気味に感じられた。

「せつちゃん、ユキちゃん、ごめんな。まさかここまで怖がるとは思ってなかつたんよ」

刹那はこのちゃんの背後から服を掴み、ビクビクと怯えているのが見えない私にも分かる程だった。私は木乃香に前から抱きつく形になっている。木乃香は重くなさそうに、普通に抱いてくれる。

それにしても木乃香の匂いは良い匂い。その匂いが、私の中にあつた恐怖感を少しだけ薄れさせてくれた。

脱衣所に入り、とりあえず服を脱ぐ。刹那と木乃香はまだ脱いでる途中だけど、それもお構いなしに浴場へと走り込む。

「むぎゆ！」

滑って転んだ。

「ユキちゃん！？」

木乃香と刹那の二人の声が重なった。

「大丈夫？」

「……うん、大丈夫」

妖怪の防御力を嘗めてもらっては困る。しかし鏡を見れば、血は出ていないもののぶつけた額は少し赤くなっていた。ひりひり……。

木乃香は自分の頭を洗うと、早々に私の頭を洗ってくれる。左隣からなにやら羨むような視線を感じるのも屡……。

頭を洗いおわると次は身体（と言うよりも尻尾）を洗ってくれる。これには刹那も加わるため、尻尾には四つの手が……。

「ひゃっ……う……」

「痒い所はありませんか」

痒いというか、くすぐったいであります……。

* * *

夕ご飯。私だけ揚げ物が多いです。だって好きなんだから仕方ないじゃないか。

……本当はご飯はお風呂に入る前なんだけど、今日だけそれが逆になった。だからと言ってなにか問題があるというわけでもないからよしとする。

揚げ物が入っていたお皿が、十秒後にはただのお皿になる。

「狐雪、なにもそんなに急いで食べなくても……」

詠春さんが不安そうな表情をしながら言ってきた。私の身を案じてのことだろう。

「ええやん、お父様。いつものことなんやし、ご飯が旨い言うことやろ?」

「それはそうなのですが……喉をつまらせては」

「っ!? んんんん〜!」

「ほら、言わんこつちやない……」

喉に詰まった食べ物を置いてあったオレンジジュースで一気に飲み込む。

それから詠春さんに注意されたのは言うまでもない。

* * *

これも、もうすでにいつも通りと化した光景。刹那と木乃香の間に私が入って、私の尻尾を布団代わりにする。私自身、常に尻尾に覆われている様なものだから温かいし、布団はお役御免となったのだ。

しかし、今日だけは少し違った。

「ううう……」

刹那が夢かなにかにうなされていて、私の服を強く握って離さない。寝汗も凄いことになっている。

大丈夫だろうか……。

寝始めてから数秒後。数秒後と言っても、それは体感時間が数秒なだけであって、時計を見れば既に午前の二時になっていた。身体を揺すられる感覚で、眼が覚めた。

「ユキちゃん、ちょっとええか？」

「んあー……刹那、どうかしたの？」

「ユキちゃんはトイレ行きとうない？」

「……んー？ 別に……」

「そ、そか……」

少し俯いて、残念そうな顔。そして次は木乃香を起こそうとする。
……あ、なるほど。

「刹那、トイレ行きたいの？」

「……う、うん……」

「あー、怖いんだー」

くすくすと笑う。

「そ、そんなことあらへん！ 怖くなんかあらへん！」

その声はどこか自分に言い聞かせている様な感じだった。にんまりと、私は笑う。

「怖くないんだー。そうかー。じゃあ、行ってらっしゃい」
「は、はう……」

刹那は自ら墓穴を掘ったことに軽く後悔している様だった。プライドを取るか、尿意を取るか。……この場合便意の可能性もあるわけだけど。

「怖くなんかあらへん……怖くなんかあらへん……」

そうやって呟く刹那を見て、久しぶりな感情が私を満たした。

ああ、悪戯したいなあ。

「分かったよ、刹那。トイレ、ついて行ってあげる」

「え、ええよ！ 怖くなんかあらへんもん！」

「……あー、私もなんかお腹痛くなっちゃったなあ。ちよつとトイレいこー」

「そ、そか。なら、ウチもついでに行くわ……。別に怖いんじゃない、ユキちゃんが心配なんや」

そう言いながらも刹那は瞳を輝かせている。あーもつ可愛い……。

木乃香にお役御免となっていたはずの布団をかけて、部屋の襖を開ける。刹那は私の九尾に隠れるように後ろについてくる。

夜目がきく私でも少し怖いと感じる廊下。夏だというのに妙に冷

え込んでいる。足は冷たく、思わず身震いしそうだ。

「刹那あ。アレってなんだろう？」

廊下の先に光る「ナニカ」を指さして問い掛ける。

私の言葉にびくつと身体を震わせた刹那は、恐る恐る、という感じに廊下の先を見た。

「つつつつつ……！！ キヤ ……！！」

刹那が見たのは私が灯した鬼火。それは青白く光り、怪しげにゆらゆらと揺れる。青白いおかげで、人魂に見えなくもない。

「あつ……ああ……」

「……せつ、な……？」

なにやら、嫌な予感がする。

ギギギ……とブリキ人形の様な動きで背後の刹那を見た。

「うつ……ひつく……ふわああああん」

見た感じ。そう、見た感じのことをそのまま伝えると……刹那、お漏らし……。

それも、テレビを見てた時に漏れたのとはレベルが違った。こんなレベル測りたくなかないけど……言うならば、「全部出ちゃいました」だ。

「う、ごめつ！ 今の私の仕業だから！ そんな怯えないで！ 本当ごめんって！」

嗚咽混じりに泣き崩れる。と、とりあえず着替え、着替えだ。え、ええつとえーつと。

「ユキ、ユキちゃ……このこと、誰にも言わんといてな……？」
「……う、うん。なんか本当御免……」

この後、どうすればいいのか分からない私の元に、刹那の悲鳴を聞いて駆けつけた女中さんと詠春さんが来てくれた。

女中さんは現状の把握を済ませると、すぐに雑巾などを用意し、片づけを始める。詠春さんの声が聞こえたとき、刹那が私の顔を見てフルフルと首を振った。

それはつまり、「詠春さんには知られとうない」ということだった。

「詠春さんはこっちですよー」

「え、え？ 狐雪？」

詠春さんの手を半ば強制的に引っ張って詠春を自分の部屋に戻させる。それから私が刹那のいるところまで戻ると既にお漏らしの痕跡はどこにもなく、普通の板があるだけだった。シミくらいはできてもおかしくなかったと思うんだけど……。まあ、女中さんたちが有能なのだろう。

その後は刹那をお風呂に連れていき、いつも私を洗ってくれてお返しにとばかりに身体の隅々まで洗ってあげた。その際に悪戯心がぞわぞわつとこみあげてきたが、さすがに自重しようと、悪戯はなにもしなかった。

部屋に戻ると、そこはなにも変わらない部屋だけがあった。
ただ物寂しげに薄いかけ布団を握りしめた木乃香がいるだけ。

刹那を先に寝かせその上から、木乃香と刹那の間に入り込む。勿論体勢はうつ伏せ。そして木乃香の上に掛けておいてあったかけ布団を尻尾で器用に取っ払い、二人に覆い被させた。

「刹那、お詫びに今日はモフリ放題で良いよ」

ほんの罪滅ぼしのつもりだった。

「え、ホンマ？」

……これは、刹那なら少しくらい手加減してくれるだろうと思っ
た私の、計算違いだった。

「~~~~~」

今晚二回目の悲鳴は、声にならない悲鳴でしたとぞ。

第参話『邂逅』

近衛家で過ごし始めてから、既に一ヶ月ほど経った。いろいろ大変だった。木乃香に尻尾を弄られ刹那に弄られ……。一緒に寝るのはいいんだけど、寝る際に私の尻尾を布団代わりにしてくるとか……。

近衛家で力の解放を許してもらえるのは修行中のみです。つまりその時間だけ肉体年齢十四歳に戻れるというわけで……。

修行と言っても、相手がいるわけではない。ただ、相手がいることを想像してそれと戦う。イメージトレーニングみたいな感じ。

「ふっ！」

相手の顎に掌底を喰らわせ、相手が後方へと倒れそうなところに、追い打ちを畳み掛ける。

鬼火を纏った拳を腹へ減り込ませ、地面へと叩きつける。

「……少し想像の相手が弱かった……もうちょっと強さのレベルを上げるか……」

そんな感じに修行は過ぎていく。

* * *

修行が終わるとすぐに一歳児程の身体に戻される。詠春さんに「幾らなんでも小さすぎやしないか」と聞いたところ「契約の効果なので致し方ないのです」と一蹴された。少し悲しい気分です。

修行が終わってすぐ、刹那と木乃香に拉致された。

なんでも、川に遊びに行くんだとか。

* * *

川では蹴鞠をしていた。

いやなんで川に来てまで蹴鞠をしなくちゃいけない。そんな疑問を思いながらも、鞠を蹴っていく。刹那へと鞠を回し、次に刹那が木乃香へと回す。はずだった。

「あー！」

刹那の加減のミスで、鞠は川へとぼちやり。それを追いかけていた木乃香も同時に川へぼちやりした。

「このちゃん！！」

え、ちょ！ 刹那まで川にぼちやりしてどうするんですか!?

思わず「馬鹿……」と呟きたくなる気持ち。

川の流れば異常な程に早い。そんな川を子供の刹那が泳げるはずもなく、ただ溺れるだけだ。

「ええい、儘だ！」

力の解放をされていない私の妖力は極僅か。それを使い果たすものなら気絶はやむなし。二人を陸にあげたところで私は川に流されるかもしれない。

だが、護衛対象である木乃香を死なせるわけにはいかない。刹那も、それは同じだ。

川に飛び込み、流れに乗って泳ぐ。尻尾が水を吸って重くなる。

「こ、のか！ 刹那！」

木乃香の手は届いた。後は刹那！

力を振り絞り、刹那の手をギリギリで掴む。二人の服を掴み、空中へと放り投げた。足に鬼火を灯らせ、足場を作って跳躍。空中にいる二人を両脇に抱えて着地。

……ふ、決まった！

「……とか言ってる場合じゃない」

木乃香と刹那を寝かせ、脈を測る。

……二人とも異常はない。息もしている。助かった……様だ。

「随分と小さくなったな。駄犬」
「つつ!?!」

殺気。

そして声。

殺気と声の元を睨んだ。木の上に立ち、包帯をぐるぐるに巻き、
剣を持つ男が、いた。

それはどう見ても私を襲ってきた男だった。

「……………」

しまった。

そう思う。

ここは結界外。相手の侵入とか言う以前の問題。

そして、結界の外故に、詠春さんが敵との対峙に気付いてくれる
可能性も、低い。

妖力もそれ程なく、鬼火も灯程度が限界。

勝てる可能性も低いのだ。

「くくつ……。人間に飼われたか？ 墜ちたな九尾」

「あ……。う……。くつ、なんで私を狙う!」

「そんなの決まってるんだろ」

男は木から飛び降り、私を睨みながら言った。

「俺の百鬼夜行を潰したオメエの親、いつの間にか死んじゃったそ
うじゃねえか。ええ？ 復讐すらできないなんて、そりゃねえよっ

て話だろ？ だから、親のツケくらいテメエが払えつ、てんだ！」
そう言って駆けだした。駆けるといふより、翔る。
地面を翔る。剣を太陽にきらめかせながら……。

避けれない。避ければ私の後ろにいる木乃香たちに被害が及ぶ可能性だつてある。

「くっ……。《狐尾の太刀》！」

私の九尾は大きさを変幻自在に変えられる。大きさが変われば、それに比例して長さも変わる。

私は尻尾を限界まで大きくし、八つの尾を槍の様に突き出した。

「ふん……」

八本の尾はドンツドンツと地面に突き刺さっていく。男を狙ったのだが地面を穿つ結果となった。理由と言えば、男が跳んで回避したからだ。

そのまま重力の力も上乘せしての斬撃。それを残した一本の尻尾で防いだ。

「む……尻尾如きで剣を止めた？」

「私の畏れは《鬼火》。そしてそれを司る部分は尻尾。尻尾の内部に鬼火を通せば、尻尾は鉄より硬く、なにより鋭くなる！」

地面を穿っていた八本の槍が今度は男の背後から襲う。

「ちっ……」

またもやそれを跳んで回避。
余程飛び跳ねるのが好きと見える。

「いいねえ。あの親よりは手ごたえが全くねえが、いい線まで来てんぞガキ！ ……？」

男は心底楽しそうに言った。

復讐をここまで楽しそうにできるだろうか。いやできるはずがない。

つまりこの男は、壊れてしまっている。

壊れてしまったからこそ、怖い。

彼の攻撃が分からない。どんな行動をしてくるか分からない。

なにより、「剣を持つ男」という認識の時点で、既に私は恐怖を感じている……？

「うっ……うっ」

足を震わせ、それでいて立ち上がる。なんで足が震える。この前は、この男の前で普通に歩けたじゃないか。この男の前で普通に駆けることができたじゃないか。
なんで……。

その姿に、彼はなにを思ったのか。

「……やっぱりつまらねえか」

「あぐっ！？」

首を掴まれた。いつの間に目の前まで来ていたのか……。瞬動とはまた違う動き。

「あつ……がつう……」

「はははははは！ こうすればただのガキもいいところだな」

「んん……ユキちゃん？」

後方から木乃香の声が聞こえる。寝言だと願いたいが、どうやら本格的に起きてしまったらしい。

「ユキ、ちゃん……？ ユキちゃん！」

「はっ……ぐ、う、う……」

そろそろ、本格的に苦しい……。

木乃香の声が遠のいていく。

「うるさいガキだな……」

その一言が異様なほど大きく耳に響いた。

それと同時に地面に叩きつけられる。視界が暗転。ぐるりぐるりと回転していく。

やっと回転が止まった。視界はぼやけ、なにが起こっているのか理解ができない。

「やつ……離し、てえ……！」

「木乃香っ……！」

なんで……。

なんで木乃香……。
狙いは私のはずじゃあ……。

「このちゃんを離せえ!!」

刹那……。

「だ、め……………」

刹那は木乃香の護衛として剣の稽古をしていると聞いた。だけど、今の刹那に刀の装備は見られない。人間風情が素手で敵う相手なんかじゃ、ない。

しかし時既に遅し。

いつの間にか気絶から復活していた刹那は、木乃香を助けるために駆けだした。しかし、相手と数メートル差を詰めたところで、吹き飛ばされ、石の上を転がった。

恐らくは妖気。妖怪同士ならまだしも、人間……それも子供が大妖怪の妖気の中てられれば吹き飛ぶのも当たり前だ。

百鬼夜行の主になっていただけのことはあるということだ。

「ふん……………」

「せつちや、……………」

「で」

無意識のうちに足と口が動いていた。

刹那を抱き起こし、生死の確認。……さっき溺れていたせいで身体が弱っているのにあんな妖気の中てられれば死ぬことだって有り

得る。

……………脈は正常。息は荒いけど、一応できている。

「せ」

じやり、と丸石を踏みしめる。

木乃香の顔色は既に青を通り越して白だ。このままでは冗談では
すまされない。

「あ？」

「木乃香を、

離せ！！」

言つと同時に憤怒を露わにした。視界が青白く染まる。いろいろ
忙しい。暗転して回転してぼやけて霞んで今度は鬼火に覆われた様
に青白い。

……………身体が、熱い。

Side Out)

* * *

詠春は困っていた。

というのも、木乃香が刹那と遊びすぎるがために護衛のはずの刹
那が修行できないのである。しかし木乃香からすれば関西呪術協会
次期頭首候補として本山に閉じ込めて育ててこられたのだから、刹
那の様な同世代の友達ができたことはとても嬉しいのだろう。親と

しては喜ばしいのだが……。

「長様、きちんと答えてくださいな！ これ以上烏族のハーフなんかと木乃香お嬢様をくつつけさせるなど……あの九尾だってそうです！ 今は大人しいですが、いつ行動を起こすか分かったものじゃない！」

詠春の悩みの種。

それが過激派の抗議であった。

「刹那君は木乃香に忠実です。逆らうなんて有り得ない。狐雪だつてそうです。彼女の力は封印していますし、なにより主である私とその娘である木乃香には忠誠を誓ってくれた」

「ならば首輪を付けるべきです。あのような大妖怪を本山に留めることそれ自体が問題なのですぞ！」

過激派の男の言葉に、困り果て、思わず汗を垂らす詠春。

「どうあしらおうと、この男は食い付いてくる。それは今のこの男の引きさがらない体勢を見れば、すぐに分かった。」

「もし、今の現状を維持なされると申すなら、我等にも考えがあります」

「……その考えとは？」

まずは話を聞くことが大事だ。

相手の思考の、綻びを見つける。

「……大妖怪の、実験です」

「…………して、実験の具体的内容は」

「大妖怪。大妖怪ですぞ！ 日本にいるかすら分からなかったあの

大妖怪を、この山に《従者》としておいている！ この機会を見逃せば、二度と大妖怪になど会うことは成せない！ ……これはチャンス。彼女等の生態、そしてなにより、対策案を考えるには丁度良い材料なのです」

先方の考えはつまり……日本にいるかも不明であった大妖怪の研究。そんなもの、許されるはずがない。

「実験をする理由など、私には皆目見当もつきませんがね」

「貴方はどれほど平和ボケされたのですか！ 今の世も妖怪がほつき歩いていることが分かったのです。呪術協会としてこれは見逃せない問題だ！ 彼女らの生態を理解すること自体に価値がある！」

呪術協会は、元より日本に蔓延っていた妖の退治を専門としていた。陰陽術こそが呪術の基本なのだ。

「……もう一度言いますぞ。これはチャンスなのです。それに、あの狐を飼いならせば、東を屈服させることだって楽なはずだ！！」
「貴方と言う人は……、狐雪を利用しようとするのもいい加減にぐっ……！？」

いよいよ以て、キレた。堪忍袋の緒が切れたというには静かな怒りだったが、それでも詠春がキレた。これ自体が、ここ最近無かったことだ。

しかし、右手の激痛に邪魔された。まるで炎に焼かれた様な、灼熱地獄に右手だけ突っ込んだような痛みが走った。

「むっ……どうされましたか？」

「……話は後です。私は少し用事を思い出しました」

「……良いでしょう。では、失礼します」

男が部屋から出たのを確認してから、詠春も部屋から出て、狐雪の妖力を辿ろうとした。

「なっ……？ あれは……」

庭から見えた景色に詠春は驚愕した。
妖力を辿る必要すら無かった。

狐雪の九尾としての恐れ。《鬼火》で作られた火柱が上がっていたのだから。

* * *

熱い。

身体が煮え滾る。

目の前の敵を除外せんと妖怪の本能が理性を封じる。

「こ、これは……。貴様その剣、どこから取り出した！ それは、あの狐が使っていた……。！ それに、その姿……。契約を壊したというのか！？」

白面金毛九尾の狐が宝刀『尾裂狐の太刀』^{オサキ}。

見た目はただの両手剣。しかしその刀身は一メートルにもなる。勿論そんなものを、一歳児の身体である私が見えるわけもない。ならば私はどうなってしまったのか。

自分の手を見る。それは、一ヶ月前の、私の手。

「いや……強制的に契約の力を解放させたということか……」

私は人間で言う十四歳の身体に戻った、ということが。これなら、刹那を……木乃香を護れる。

剣に鬼火を纏わせる。いや、纏わされた。剣が私の畏れを吸い取っていく。

「……ならば早急に討ちとらせてもらおう」

青白い視界の中に映る敵は、私を殺そうと剣を構えている。私もそれと敵対する様に、獲物を構えた。

Side Out

* * *

男が驚愕している間にその手から逃れることができた木乃香は、怯えていた。

さつきまで自分たちと遊んでいた少女が、自分より小さい体を持っていた少女が、急激に成長し、それも剣を携えている。面影は、九尾と白い髪だけで、雰囲気はまるで違った。

「掛かって来い。貴様のその首、私が貰う」

口調にも、前までの面影など残っていなかった。

「ほざけ、ガキがああ！」

一蹴りで低空を走る。走るといふよりは、翔る。最初の一蹴り以外地面を蹴っていないのだから、これは一種の飛翔と呼べるだろう。しかし飛翔と言うには低すぎる。

なんとも表現し難い事態は、ただの《奇妙》にしか見えない。

狐雪は剣を防御の形に構える。

「っはあああ！」

男は単調な動きで剣をできる限り振り上げ、そして振り下ろす。なにかに操られているかのような簡単な動きは、何故か不気味に感じた。

鉄と鉄が削り合う音が鳴り響く。

剣を受け止めた狐雪はぶつかり合った剣の重心をずらし、それを去なした。

「ちっ………！！！」

その一連の行動から、剣士としてはそれなりの腕だと男は即座に理解した。

それこそ、百鬼夜行を率いていた自分よりも強い大物……直感がそう告げた。逃げたところで逃げれるとは思えない。ならばこそ、どんな手を使つても相手の油断を誘うべきだ。

「くっそ、ガキ、こっち来い！」

「きゃ！！ や、やめてえな………」

木乃香を片手で持ち、剣を首に押し付けた。

「くっくっく。これでお前は俺に近づくことすらできまい！」

「貴様……そこまでするか。墜ちたのはどちらか、ちゃんと見るべきだぞ、下郎！」

両手剣を持つ両手に自然と力が籠る。

「知ったことか！」

そう男が吠えた瞬間、木乃香の首に宛がわれていた剣は勢い余り、その頬へと傷を負わせた。

「……………」

それは、主人を傷つけたということに等しい。

本来の主は詠春。だが、その娘ならば自分の主に等しい存在。

ただの護衛対象という見方から、いつの間にか、自分の主という見方へと変わっていた。

剛つと音を立てて、狐雪から何かが放出されていく。九尾から、青白い炎が舞いあがる。それはまるで狐雪のオーラの様に背に纏っていく。

それは次第に火力を増していき。

更に豪つと音を立てて一本の火柱を作り上げた。

「なっ……………?」

男はそれを理解できなかった。

畏れというのは、その妖怪の力量を示すものにもなっている。
その畏れである《鬼火》が、天と地を繋ぐが如く火柱へとなっている。

それはつまり。

「そんな……お前の、親でも、そこまで鬼火は出せていなかったはずだ……。何故、お前……」

包帯で隠された顔。しかしその顔には、明らかな疑問が覗き見れた。

「きゃっ……」

男は思わず木乃香を離す。重力に従って落ちた木乃香は、四つん這いになって逃げ出す。息を荒く男を見る。男は以前、なにも出来ずに疑問のみを提示していた。

「貴様の疑問に答えてやる」

その凜とした女性の声の主を木乃香は見遣る。

両手剣を肩に乗せ、まるで歴戦の戦士が如くそこに立つ女性。それが狐雪なのだと分かかっていても解りたくない。

「何故私が私の両親よりも巨大な鬼火を放出できるのか、それは」

肩に乗せていた両手剣を片手で持ち、それを大きく振り上げた。それと同時に鬼火の柱は蛇が如く壱を巻き、《尾裂狐の太刀》を囲む

そして狐雪は言葉を続けた。

「 私が、私の両親より強いからだ」

そして、それを告げたと同時に剣を振り下ろした。

ぶおん！

風を斬りながら、振り上げていた剣を静かに振り下ろした。
それと同時に埒を巻いていた鬼火は斬撃に乗り、地を翔た。

「ぐっ……ああああ！」

蛇のように男に喰らいついた鬼火は男を焼いていく。頭を抱え、
なにも喋ることもできず、その場に男は倒れ込んだ。既に、黒に染
まり焦げたそれは、男と言って言っても分からないが。

木乃香はその光景に思わず目を閉じた。

どざりっ。

しかし、その何かが倒れた音にもう一度目を開ける。一瞬焼死体
が視界の端に映ったが、気にしていられない。なぜならその音は狐
雪がいた方から聞こえたから。

「ユキちゃん！」

想像に違わず、狐雪はその場に倒れ伏していた。
腰に生えた九尾も既に力なくヘナヘナとしている。

そんな狐雪に、木乃香は小さな足を使って駆け寄った。

「この、か……良かった、無事だった……」

狐雪は、自分の力で狐雪すらも焼いてしまったのではないかと不安でしよがなかつた。しかし、力の制御などできるはずもなかったのだ。なぜならこれは一種の暴走。自分の手で護ることができなかった。主というには小さくか弱い少女を護れなかつた。

木乃香が傷ついたという事実が、傷つけられたという真実が狐雪の暴走を引き起こした。

しかし、百年を生きる大妖怪……寿命で言えばそれこそ千年すら凌駕する彼女らがこの程度で暴走するのだろうか。

……恐らくは契約による幼児化のためだ。

契約のため力を封じる際、確かに身体が小さくなることはある。だが、その中身までもが子供になることなどあり得ない。だが狐雪にはそれが起こってしまった。木乃香や刹那と遊んで、詠春に頭をなでられ、共に食べて共に寝て。そんな日々が引き起こした『肉体による精神後退』。

その所為で精神の安定が取れていなかったのだ。

閑話休題。

木乃香が死んでいなかった。その事実が、狐雪を安心させた。そ

して狐雪の意識は、不安と共に掻き消えていった。

「ユキちゃん！？ ユキちゃん！ ……はっ、そや。せっちゃんは！？」

キヨロキヨロと周囲を見渡し、刹那を探す。

刹那は川に流されるギリギリにいた。刹那の元に駆け寄るべきか。しかし、狐雪のことも気になる。どうすればいいのか困ってる時に、その声が聞こえた。

「木乃香！ 刹那君！ 狐雪！」

一番頼れる、父親の声。

* * *

（狐雪Side）

どたばたと忙しい足音に起こされた。いつもと違う妙な違和感を感じながら、上体を起こす。

「……………あれ、木乃香と刹那は……………」

どうやら、いつも違う妙な違和感の正体はいつもの二人が横にいないことのようにだ。他にも、部屋の匂いが違ったり、いつもより広い感じがしたり……………。

すすす、と襖が開いた。

そこには水の入った桶とタオルを持っている近衛家の女中さんが

立っていた。

「あ、狐雪様、眼が覚めましたか。良かった……。御影、狐雪様が置きましたと詠春様に報告に行ってきた！」

廊下の方を向いて話しかける女中さん。それから少しして「はい！」という返事が返ってきた。

「えっと……私、どうして……」

「覚えておりませんか？ あなたは木乃香お嬢様を庇い、身体の至るところに火傷を負ったのです。まあ、火傷は自滅だったらいいですけど」

苦笑いでそんなことを言う女中さん。

はて、自滅で火傷……。覚えがない。えーと……刹那と木乃香とで川に遊びに行つて……。

そこで、あの包帯男と。

「そ、そうだ。木乃香と刹那は！？」

「刹那は大丈夫です。まだ少し、敵と対峙したことへの恐怖感が残つてはいるそうですが、身体に異常はありません。木乃香お嬢様も同じくです」

持ってきた桶を畳の上に置き、中に淹れた水にタオルを浸す。その水を吸ったタオルを絞り、私のおでこに置いてくれた。

「ふみゆ！？」

置いたついでに上体を無理矢理押し倒された。

突然のことだったせいで変な声が出た。

「とりあえず、今は寝ていてください」

優しげな頬笑み。

寝ていなければならない程に私は重傷、なんだろうか。

そんなことを疑問に思っている中、どたどたと廊下を走ってくる音。

「狐雪!!」

「ユキちゃん!!」

近衛親子が、思いつ切り襖を開けて登場した。

「ユキちゃん、大丈夫なん？ 痛ない？」

「狐雪、火傷の具合は……、本当に大丈夫なんですか？」

……親子だ。

とりあえず私の身体をぺたぺた触ってくるのは止めてほしい。

「別に大丈夫ですよ、痛みはありませんから」

「そう、ですか。それなら良かった」

「ふう……もう、何日間も寝坊しよって……。元気になったらお仕置きやで？」

何日間も寝坊……？

つまり、私は何日間も寝ていたと……。

なるほど。私の火傷の具合がどんなものだったのかは知らないけど、軽度のものなら既に直っていてもおかしくはない。

「お仕置き……」ガクブル。

「じ、冗談や！ そんな怯えんといてえな！」

ホント？ と質問。

木乃香は笑顔で「ホンマや」と答えてくれた。その笑顔に、私も笑顔で返す。

「……狐雪。起きて早々、申し訳ないのですが、現状の報告を……」
「……はい、お願いします」

* * *

「詠春さんとの契約は破棄……？ 何故ですか」

「私では貴女の暴走を抑えられないことに気付いたのです。私の力の弱さが、貴女の暴走を引き起こし、貴女自身を傷つけたと言っても過言ではない」

しかしだというのなら私は何故この一歳児とも言える身体になっっているのか。

考えられるのは、新たな主ができたということだが……。

「私は、詠春さん以外と契約なんて……」

「え、ウチとはけーやくしたなかつたん……？」

「……え？」

木乃香が、契約？

た、確か、詠春さんの話によれば「木乃香は裏に近づけたくない」

……だったはず。なのに、私なんかと契約していいのだろうか。

「木乃香と貴女の相性は、非常にばつちりだったのです。私もつい先日知りまして……。貴女を抑えるには、木乃香が一番なのです」
「ユキちゃんは今がウチがちゃんとして抑えたる」

木乃香が無い胸を張って言う。

確かに木乃香の魔力量なら私を抑えることも簡単だろう。詠春さんの言う『相性』というのは建前で、本当は魔力面での『強制的な制御』ができるという意味なのだろう。

恐らくは、過激派とかいう人達が、詠春さんにそうする様に圧力をかけたのだろう。

そんなことも知らない木乃香の類には絆創膏。

私のせいで傷つけたと言っても過言ではないその傷……。

「……木乃香、木乃香は私が護る。今度こそ、護るから……」

「……わかつとる。せつちゃんも、そう言うつとった。……せつちゃんにも言うたけど、無理だけはせえへんでな？」

「それは木乃香に言われたくないかも……」

木乃香が一番無理したり我慢したりするタイプだし……。

刹那もだけど、木乃香も大概に……。

「では、木乃香と狐雪にはもう一個伝えておくべきことがあります」

詠春さんは声を低くして、真剣な表情をした。

「刹那君は、神鳴流の師範代のいるところへ修行に行きました。少しでも帰ってくるようには言っているのですが……。刹那君は責任

感の強い子ですから、自分を責めているのかもしれない」

確かに刹那は責任感が強い。

頑固とも言えるその性格と相俟って、刹那は護衛と言うよりは親とも言える立場で木乃香を見てきた。いけないことはいけないと言いつつ、できるだけ木乃香を止めようとする。親と言う割には年も近いから、この場合は本当の意味での大親友と言った方が良いかもしれない。

そして、そんな刹那はこの前の戦闘で、敵に触れることすら無く敗れた。

それなら責任を感じ、修業に明け暮れる日々が始まってもおかしくない。

木乃香の方をちらりと見た。

やはりあれから刹那と会っていないのか、どこか寂しげな眼差しをしていた。私の視線に気づくと、すぐに笑いかけてくれたけど。

第参話『邂逅』（後書き）

文が非常に拙い。まあ、自己満小説だしいつか。

第四話『妖獣の契約』

あれから数年経った。

木乃香は六歳となり、麻帆良と言う場所に行くらしい。護衛のはずの私はしかし、過激派から「大妖怪を東に送るなど百害あって一利なし」と言われ、木乃香に着いていくことができない。もし無理にでも着いていこうとすれば、恐らく過激派も強硬策に出る。その強硬策に木乃香が巻き込まれる可能性も否めないので、仕方なしに私は本山に止まることとなった。

《妖獣の契約》は西洋魔法使いという人達の契約《仮契約》と同じ様なものだ。違うのは、カードが出てくるわけでは無く、主の体それ自体に《刻印》が刻まれること。

その性能も従者の才能や技量によって変わる。例えば、才能もなければ技量もない者が妖獣を自分のところへと召喚しようとしても、その者の半径一キロメートル以内に妖獣がいないと召喚できなかつたりする。しかし木乃香の技量は兎も角、才能はとてつもないものだ。天性の莫大な魔力のおかげか、「半径約一五〇〇?以内」での召喚が可能。……言ってしまうえば、直径にして日本国内ならどこでも召喚が可能らしい。

勿論、これは理論上での話。そこまでの召喚なら技量も必要となるだろうから、今は精々七〇〇?が限界だろう。しかし埼玉の《麻帆良》から京都の《総本山》までは約五〇〇?。十分事足りる。

念話という性能はないために、話のやり取りは手紙とかになっちゃうかもしれないけど、まあ、木乃香なら週一くらいのペースでよ

こしてくれと思う。

仮契約と妖獣の契約の違いはまだある。あれ、こうみると全く同じ様なものじゃあないような……まあ、いいか！

例えば、向こうはアーティファクトとかいう魔法具が出るらしいけど、こちらにそれはない。そもそも陰陽術は精霊とかいうやつのは借りないものが多い。契約だって、精霊と言う者の介入はなく、従者と主のみで行われる。

ちなみに、私達妖獣の力を解放する際、主には妖獣の妖力が纏われ、自然と防御力を高まらせる。ちょっととした剣では斬れない程の防御力だ。使い手と業物によってはその限りでは無いけれど……。

さて、何故こんな細かい説明を今更しているのかと言えば、今日木乃香が麻帆良へと行く予定となっている。その為、本格的に契約をしようという話になったのだ。

妖獣の契約は、妖怪と人間、二人同意のもとに行われる。半強制的に交わされたあの契約は、不完全契約だった。……恐らく、数年前の私の暴走はそれが原因だと思われる。木乃香の魔力であれば、不完全契約でも抑えられたのだけれど……なにせ私の力の解放ができなかった。修行もこの姿のままでは行えなかった……。

しかし！ 本格的な契約をすれば主の『一言』で力を解放できるのだ！

はいそういうことで。

「なんや改めてキスするとなると恥ずかしいわあ〜」

「改めてキスっていうか、私からすればファーストキスなんですけど」

木乃香とキスをした覚えがない。

しかし木乃香は頭にクエスチョンマーク。多分、覚えただけの言葉を使ってみた感じなんだろうなあ……。

「魔法陣が必要ないというのは楽ですね」

詠春さん。あんた娘の前でそんなこと言って良いんですか。妖怪側は兎も角魔法側には近づけないって言ってましたよね？

まあ、まだ六歳だし、魔法と言う幻想的な響きを持つ言葉を深く考える様なこともないだろうけど……。

「じゃ、ユキちゃん。いただきます」

なにを!?

とは言つまい。分かっている。こ状況下での「いただきます」は、私のファーストキスをいただくという意味しか持たない。

木乃香と私の背丈の差は随分と広がっている。そりゃそうだ。一歳児の体で精いっぱい背伸びしたって三歳児にも届かない様なこの身長……。

その差を、木乃香が私を抱きかかえることで埋めた。六歳児でも一歳児の体重は少し重いらしく、「おととと」とバランスを一瞬崩した。

六歳児と一歳児、それも同性の口吸いなんてなかなか見られないだろう……。

木乃香は既に麻帆良初等部に行くための服に着替えている。右手には包帯を巻いている。怪我をしたわけではない。『刻印』が右手に現れたのだ。私の暴走時、詠春さんの右手に痛みが走ったと聞いた。つまり私との契約証明となる刻印は右手に現れるのだろうという予測はしてあった。その予測が本当に当たってしまったわけだ。つまりその刺青にも見えなくてもない刻印を隠す為の包帯だ。

木乃香は今から学園に行き、学園を見て回り、そしてすぐに寮へと行き、翌日からは学校に通うこととなっている。つまり、木乃香と会うことは困難となる。

「木乃香木乃香木乃香！」

「ユキちゃんユキちゃんユキちゃん！」

故に共に抱き合いながらいろんな部分擦りつけて匂い付け的なのもやっちゃってるわけで。

それを詠春さんが苦笑いで見てるけど、気にせず匂い付けを続ける。

「あ、あの……そろそろ行きまへんと、麻帆良の見学時間とかが……」

女中さんが汗を垂らしながら木乃香の肩を優しく掴んで言った。

「そやな。それじゃ、ユキちゃん」

「うー……」

「大丈夫や。手紙送るから、寂しくなんかない。そやな？」

「……うん……」

「よし、ええ子や。じゃ、行ってきますお父様、ユキちゃん」

「……いつてらっしゃい」「……」

階段を下りていく木乃香を見守る。見えなくなるまで、ずっと。

木乃香が乗った車が見えなくなると同時に、詠春さんが私を抱きかかえた。何故よ。

「……狐雪。少しだけ、お話があります」

「……？」

いや、だからなんで抱きかかえた。

* * *

詠春さんの話を聞いた私は、寂しくなった木乃香の部屋のベッドで横になっていた。仰向けに寝ることができないから、横を向いて寝てる状態。

過激派がいるせいで、貴女は学園に向かえません。ですがいつかきつと、木乃香と会わせませぬ。だから、待っていてほしい。

詠春さんは、そう言った。

詠春さんに迷惑をかけてばかりで、何とも言えない気持ちになる。

そういえば、木乃香の親のはずなのに、態々東に送る理由はなんなのだろう。

東と西は仲が険悪だと聞くが……。木乃香を向こうに送れば、よ
り過激派の人達は過激になるのではないだろうか。詠春さんとして、
それは良いことなのか。いや、良いことのはずがない。ならば何故
……。

「狐雪さんはおらっしやいますでしょうか」

襖の向こうから、男性の声が聞こえた。

本山には過激派をなるだけ遠ざけるため、男性が少なくなってい
る。……というのも、過激派の大半……。それどこか、九割は男性な
のだ。

そんな男性が、ここにいる。本山の結界を掻い潜れたとでも言う
のか？

「おらっしやらないのですか？」

寝たふりをするにした。

面倒事に巻き込まれるのは御免だ。ここに木乃香がいたならば率
先して私が男から木乃香を護ろうとするのだけど、如何せん護る対
象がない今の状況……。ならば知らんふりをするのが一番。

「……いないようですが。どうします？」

「いや、確かに妖力はここに……。ここは様子を……」

男性は二人……？

どういうことだ。やっぱり過激派なのだろうか。いや、でもなあ
……。

うん。過激派と判断。鬼火で追いかえしてやろうか。

「……誰ですか！ あなた達は！」

おや。女中さんの声。時計を見ると、既に夜中の七時。いつもなら、もう夜ごはんを食べている時間だ。……なかなか食べにこない私を心配したのだろうか。

「え、ちょ！ 待つてください、そんな槍向けないで！ てかどつから取り出したんですかそんなの!？」

男の焦った声に、思わず吹き出しそうになった。

「まあ落ち着け。私達は狐雪様に用があつてきた、東妖怪だ」

先程の焦った男とは逆に冷静な男の声。

……ん？ 東妖怪？ 確か、関東に住まう妖怪のことを総称してそう呼んでいた様な……？

「東妖怪？ 何故そんなものがここにいる!」

「いやなに、伝説とされてきた一族である白面金毛九尾の狐が人間に飼われていると聞いたのでな。あの御方の娘さん……だったかな。名は確か、狐雪だと聞いたが……その狐雪様に、関東を牛耳る《九尾組》に来ていただきたいと思いついて来た次第。妖怪の中でも特殊な妖力を持っているのだよ、白面金毛九尾の狐は。その妖力を辿ったら、噂通り人の住んでいるこの場所に辿りついたというわけだ」

男は饒舌に、一息で説明を終えた。

「ま、そういうことつす。平たく言えば、狐雪様をお迎えに上がったと、そんな感じですよ」

「話は聞かせていただきました。ですが、狐雪を貴女たちにホイホイとくれてやるわけにはいきませんね。木乃香が悲しみますし、私達が寂しくなる」

詠春さんの声……。

なんだろう、外の空気が凄く重い……。

まあ、過激派の人じゃないなら、たぶん害はないでしょ。今も話し合いしてるみたいだし。

……うん、寝よ。

* * *

結局昨日の東妖怪はなんだったのか。凄く気になる翌日の朝。寝巻きから巫女服へと着替えを済まし、外に出る。

「御鈴。おはよう」

「あ、おはようございます。狐雪様」

笑顔で返してくれるこのポニーテールの巫女さんは私の御世話役の様な人。遂この間、本山に務めることになったのだから。

前世話係の人は逆にどっかに出張だとか……。まあ、異動だろうけど。

「初めまして、狐雪さん」

「……え」

知らない男性が二人、箒を持って庭を掃除していた。

何故よ。

一人は帽子を深く被った金髪の男。腰から生えた茶色い尻尾が狸の妖怪だと告げていた。

もう一人は白髪に黒褐色の男。黒い尻尾からして犬か狼の妖怪。

「ふむ……やはり白い九尾、間違いではなかったようだな。あの御方に、どこことなく似ている」

黒褐色の男がなにやら皮肉的な笑みで言った。

知らんがな。あの御方って誰やねん。あんたらも誰やねん。

「えっと……関東の方の妖怪の《組》を束ねているヤクザらしいです」

私の疑問が顔に出ていたらしく、御鈴が教えてくれる。……ヤクザ？

「もっと詳しく言うなら、《九尾組》として関東を手中に収めた御方の部下共です」

「私達はその中でも幹部、ということだ」

そんな人が何故ここにいるのか。正直言っただけ謎しかない。

関東と言えば、私の産まれた土地だ。だが、半生を関西で過ごしてきた私からすれば、特に思い入れがあるわけでもない場所……。

「で、なんでそんな人達がここにいるわけ？」

「それは……まあ、なんていうか、私達を抑えていた御方が随分前に亡くなってしまいました……で、なんと言いますか……」

「つまりなにが言いたいのかと言えば、君を新たな長として迎えたと言っているのだ」

「は？」

「東の妖共を統べる存在になりたくないか？」

「別に」

「……そうか。まあ、強制はしないよ。ただ、私達は君をいつでも迎えよう。まあ、西に行ったまま帰って来なくなった君を、『強制的に連れて戻そうとする輩』がいるかもしれないがね。……行くぞ、嘉助」

「はいはい、分かりましたよ。志郎さん」

姿が消えた。いや、気配すら遮断された。

東妖怪……。京都の妖怪は最近皆動かないから、ちゃんと生きては帰れるはずだ。もし京妖怪が活発的な時期にきていたらならば……。考えたくもないけど、あの二人は生きては帰れないだろう。生きて帰るには詠春さんが付き添わなくてはいけないレベルだ。

「なんだか可笑しな人達ですね」

くすくすと笑う。

あれが可笑しいのレベルなの……？

「……まあ、そうだね」

とりあえずはそういうことにしておいた。

「それより狐雪様、今日はどこかへお出かけですか？」

庭を箒で掃除しながら、今の私の服装を見て思ったのだろう疑問を聞いてきた。

今の私は巫女服。いつも出掛けない時とかは寝巻きのままだ。

「んー、まあ、気分かな。木乃香のおもりをしないで済むようになつたわけだし？」

「あらあら、強がっちゃって。本当は寂しいから私のところに来たのでしょうか？」

「……分かつてるなら聞かないでよ……」

いつもの私の指定席である縁側に座る。すぐ後ろが詠春さんの部屋なわけだが、もしかするとまだ寝ているかもしれない。あの人たちがいいたということは、下手をすれば一晩中話し合いをしていたのかもしれないし。

……それにしたって、幾ら私が珍しい妖怪だからって東の長に迎え入れようとするなんて……考えが甘い。私は、女の子二人、護ることができなかつたのに。

結果だけを言うならば、護ることはできたのかもしれないが、木乃香は肉体に、刹那は精神に怪我を負った。木乃香の傷は一ヶ月もすれば跡もなくなっていたが……刹那は分からない。この数年、結局刹那とは顔を合わせていない。一ヶ月しか会っていなかった刹那の顔は妖怪だからその記憶力で覚えているけど……。もし私が人間なら、顔も、声も、性格も、下手をすれば『刹那』という名前すらも忘れていくかもしれない程の長い時間会っていないのだ。そしてこれから先も会える機会はあるかどうか……。

ぐうう〜。

なにやら間抜けな音が私の腹部から鳴った。

私のお腹は生きていない。厳密に言えば生きてはいるものの意思はない。勿論、鳴くこともない。だとすればお腹の中のムシの声。

「……………」

「……あ、そういえば狐雪様は昨日夕ご飯をお食べになっておりませんでしたね。今すぐにも調理いたしますのでお待ちください」

御鈴は今のを聞いてから即座に行動に出た。

「気は使うな」と言おうとして目の前を向くとそこに既に御鈴はいなかった。

とりあえず、御鈴は調理に行ってしまったようだ。行動が早いとはいえまさか調理まで早いということはないだろう。なんせ食材を煮たり炒めたり焼いたりするのだから「狐雪様」。ご飯の用意ができましたよー」

「はえーよ……………」

思わず呟いてしまうほどに、御鈴の調理は早かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1592ba/>

近衛家のペット！ ～妖獣の狐雪～

2012年1月12日09時47分発行